

四十回蒼天句会 今月の一句

令和八年二月十二日 兼題：梅、又は自由

老いゆくを寿ぐごとし梅香る

公子

冬木立夕日にもらう薄化粧

婦紗子

香を放つ春告草や偕楽園

賢一

梅が香やこころ平らに観世音

繁一

梅が香や十五年目の古団地

孝志

幸せの逃げ足速し冬茜

洋一

啓蟄や小さき庭のプレリユード

信江

寿ぎのチャペルを包む春の雪

静江

千木高き古き社の枝垂梅

鎮夫

梅香るいつか行きたき成田山

国祥

吊り大根柵状並ぶ風の浜

隆彦

汐鳴りや浜にも春の来つつあり

重子

三叉路に三角の屋根蝶の昼

朱美

浮寝鳥波に揺蕩ひ鷺は舞ひ

紹子

群れ咲きてひとりの風情水仙花

晴代

眼の手術終えてまばゆし冬の景

久恵